

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（保健学）	氏名	彭 徐鑫
学位授与の条件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 A Study of the Structure of Japanese University Students' Awareness of Long-Term Care Socialization (大学生に対する介護の社会化への意識の構造に関する研究)			
論文審査担当者			
主査	教授	新福 洋子	印
審査委員	教授	岡村 仁	
審査委員	教授	森山 美知子	
〔論文審査の結果の要旨〕			
<p>日本は急速に少子高齢化が進み，合計特殊出生率が低下傾向にある。特に24歳以下の若者にとって30年以後の2055年には肩車式で高齢者を支える立場となる。高齢化は世界的にも共通する課題であることから，公的介護保険が制度化された日本の青年層の意識を明らかにし，他国においても社会が介護を担える仕組みを提案することが必要である。本研究では，介護保険制度を継続させていくために若い世代がどのような意識を持っているかに着目し，介護の社会化への意識の構造を明らかにすることを目的とした。</p> <p>本研究の操作的定義として，家族介護者に対する「介護の社会化」とは「介護の負担や行動を個人や家族で抱え込むのではなく専門的な介護サービスに任すこと」とし，「介護の社会化への意識」とは，「親やあなたが介護を受ける状態になったときのあなたの考え」とした。調査は，A県内2大学の大学生を対象にインターネット調査を2回行った。1回目調査は探索的因子分析を検討するため432人の学生を対象とし，2回目調査は確証的因子分析を検討するため263人の学生を対象に実施した。調査内容は，属性（性別，年齢，学部）と介護の社会化への意識の原案である。分析方法は，探索的因子分析の結果に基づき，構成概念妥当性を確証的因子分析によって検証した。基準関連妥当性は，介護における社会福祉政策の重要性についての考えを尋ねて検証した。収束的妥当性は，合成信頼性(CR)と平均分散抽出(AVE)を求めた。信頼性はCronbach's α係数を求めた。</p> <p>結果，1回目調査は209名(48.4%)，2回目は149名(56.7%)の有効回答を得た。1回目調査の性別は男性56名(26.8%)，女性153名(73.2%)であり，平均年齢は20.06±1.49歳であった。学部は医療系が120名(57.4%)であり，医療系以外が89名(42.6%)であった。2回目調査では，男性34名(22.8%)，女性115名(77.2%)であり，平均年齢は20.03±2.45歳であった。学部は医療系が112名(75.2%)，医療系以外が37名(24.8%)であった。</p>			

介護の社会化への意識の項目は、天井効果が見られた1項目と項目間相関で $r < 0.2$ 以下の2項目（項目11： $r=0.139$, $p=0.045$ ；項目15： $r=0.175$, $p=0.011$ ）を削除した。探索的因子分析により、介護の社会化に対する意識は【家族を介護する時の介護負担】【家族の一員として介護する責任感】【家族介護を社会に任せる感情】の3因子10項目が抽出された。全体の Cronbach's α 係数は 0.774 であった。各因子の Cronbach's α 係数は 0.845, 0.729 と 0.674 であった。探索的因子分析から得られた因子構造を検討した確証的因子分析の適合度モデル指標は、 $\chi^2/df=1.973$, GFI=0.908, AGFI=0.871, CFI=0.918 と RMSEA=0.081 であった。収束的妥当性は、各因子の AVE が 0.654, 0.404 と 0.393 であり、各因子の CR は、0.849, 0.729 と 0.659 であった。介護の社会化への意識項目全体と介護における社会福祉政策の重要性についての考えには $r = 0.296$ ($p < 0.01$) の弱い相関が得られた。

介護の社会化への意識の構造は、確証的因子分析での適合度モデル指標である AGFI がやや低く、RMSEA がやや高かったが、概ね許容範囲内であった。収束的妥当性では、モデルとしての基準を満たし、収束の有効性は許容可能範囲であった。介護の社会化の構造には【家族を介護する時の介護負担】が含まれており、介護負担の軽減が介護の社会化への意識を促進する可能性が示された。また、【家族介護を社会に任せる感情】と【家族の一員として介護する責任感】では、家族を介護する責任や伝統的な強い親孝行の義務感が、介護の社会化への意識に負の影響を受けていることを示していた。

以上の結果から、本論文は次の介護を担う世代である大学生が介護の社会化についても意識構造を明らかにした点について新規性が高く、評価される。

よって審査委員会委員全員は、本論文が著者に博士（保健学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。